理論編 1

インタビュー

「学びの芽生え」が生涯の学びの出発点になる

幼児期の遊びの中での「学びの芽生え」が、今注目されています。
学びの芽生えとは具体的にどのような状態を表し、なぜ子どもにとって重要なのでしょうか。
文部科学省「幼小接続会議」の座長を務めた白梅学園大学の無藤隆先生に
解説していただきました。

白梅学園大学子ども学部教授
無藤 隆
むとう・たかし
白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。「幼小接続会議」座長のほか、文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に『現場と学問のふれあうところ』（新曜社）など。

幼児教育は小学校の「準備」ではなく「土台」

幼稚園、保育所、認定こども園における幼児教育・保育はどうあるべきか、そしてそれを小学校にどのようにつなげるべきかということが、文部科学省「幼小接続会議」の重要な論点でした。近年、幼小接続が注目されている直接的な背景には、いわゆる小１プロブレムがあるのですが、この問題を解決するには、単に幼稚園・保育所などが「準備教育」をすればよいわけではありません。幼児教育を、小学校以降の教育の「土台」ととらえ、一人ひとりの子どもに対して長期的な視野をもった援助をする必要があります。

全国で幼小接続の実践も活発になってきていますが、必ずしも期待通りの成果はあがっていないようです。その要因には３つが考えられますが、これらはいずれも幼児教育の本質が十分に理解されていないことに根ざしています。

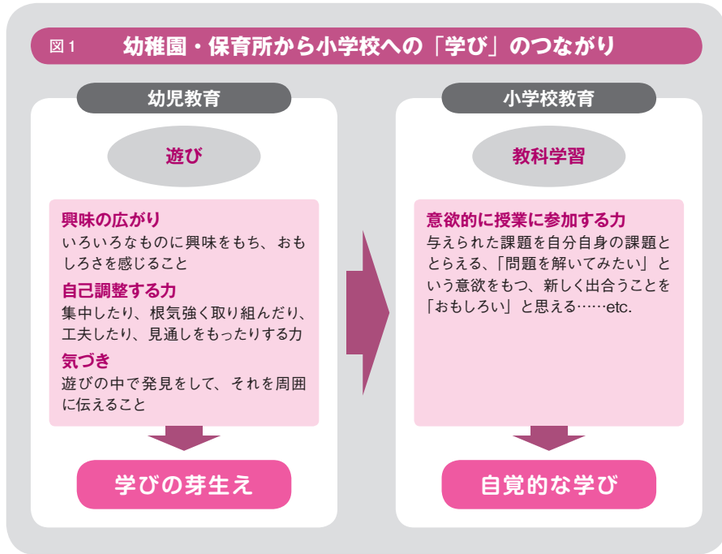
１つは、先ほど述べたように、幼児教育を小学校の「準備教育」と考え、読み書きや計算、長時間椅子に座る練習などに終始してしまうケースです。確かに、そのような指導が必要な面もありますが、それは幼児教育の本質ではありません。

２つめは、逆に「幼児期は遊んでいればいい」という発想です。遊びが大切なのは、その中に「学び」があるからです。保育者がその点を理解せず、単に子どもが遊んでいるだけでは、なかなか学びは生じません。

３つめは、幼児教育を基盤として、その上に小学校の学びを積み上げていくという意識を、小学校側が十分にもっていないケースです。子どもは遊びの中で、興味をもったり、気づいたり、考えたりする力を伸ばしていますが、それを小学校側が理解せず、ゼロからのスタートという意識をもっていることもあるようです。

幼小接続が目指すのは、幼児期の教育と小学校教育が相互理解を深めながら、お互いの良質な部分を取り入れ合うことです。それによって子どもは園における学びを土台として、小学校以降の学びをスムーズに発展させることができます。

図1 幼稚園・保育所から小学校への「学び」のつながり



「学びの芽生え」があって「自覚的な学び」が生まれる

幼小接続を考えるうえで重要なのが、子どもの学びがどのように発展していくかを理解することです。幼小の双方の関係者が「幼児期の『学びの芽生え』から、小学校低学年の『自覚的な学び』へ」というつながりを十分に踏まえた援助や指導を心がける必要があります。

具体的に説明しましょう。「学びの芽生え」とは、遊びの中で、楽しみ、試し、工夫し、見通しをもつというふうに、子ども自身が遊びを発展させていくことです（具体例は４ページ図２を参照）。幼稚園教育要領で言えば、「体験の関連性」（第３章を参照）を指します。例えば、葉っぱをすりつぶしている子どもは、初めは保育者のまねをしますが、楽しくなると、木の実で試したり、異なる色水を混ぜる工夫をしたりしながら、次第に「こんな色を作りたい」「何かを染めてみたい」といった目的や計画をもって遊ぶようになります。これが、学びの芽生えです。

学びの芽生えは、小学校低学年で育つ「自覚的な学び」の土台になります。自覚的な学びとは、先生が与える課題に興味をもち、自分の課題として受けとめ、「解いてみたい」という意欲をもって学ぶことです。単におとなしく椅子に座っているのではなく、意欲的に授業に参加する力と言うこともできるでしょう。

ここから始めてみませんか？「学びの芽生え」を促す援助

◎遊びを発展させましょう
同じ遊びを繰り返すのではなく、今日、明日、来週……と、少しずつ複雑な遊びへと発展させることが大切です。毎日の保育記録を振り返り、翌日以降の計画を練るとよいでしょう。

◎協同的な活動を入れましょう
５歳になったころから、特にグループで行う協同的な活動を重視してください。１日では終わらない連続的な活動の方が協同的な活動を通した学びは深まりやすくなります。

◎言葉による伝え合いを取り入れましょう
帰りの時間に何をして遊んだかを発表し合うなど、形式はさまざまで構いませんから、言葉による伝え合いの活動を取り入れましょう。

「学びの芽生え」は遊びの中でこそ経験できる

学びの芽生えがどのように自覚的な学びへとつながるかは、学びの芽生えをもたらす３つのポイントを説明することで理解していただけるでしょう。それは、「興味の広がり」「自己調整する力」「気づき」です。

「興味の広がり」は、遊びの中でいろいろなものに興味をもち、おもしろさを感じることです。これが十分に育った子どもは、小学校に入っ

図2　援助例（色水遊びの場合）

（5歳児／7〜9月頃）

最初は、保育者のまねをして、葉っぱをすりつぶして色水を作る

学びの芽生え

興味・保育者が葉っぱや草の実をすりつぶしているのに興味をもつ

気づき・葉っぱをすりつぶすと、色が出ることに気づく

援助　他の葉っぱや花、草の実を用意しておき、子どもが気づくような環境をつくる

さまざまな素材を使って、異なる色の色水作りを楽しむようになる

学びの芽生え

興味・葉っぱだけでなく、花の実にも興味が広がる

気づき・他の材料を使うと、別の色ができることに気づく

援助　色水を混ぜると、異なる色になることに気づくようにし、この気づきに共感する。ペットボトルなどを多く準備する

色水を混ぜて、いろいろな色を作って遊び始める

学びの芽生え

自己調整・自分の好きな色を作るために、各色水の量を加減して混ぜるなどの工夫をする

気づき・色水を混ぜると、別の色になることや同じ色でも濃淡があることに気づく
・自分の色水を友だちに見せて、気づきを伝え合う

援助　子どものつぶやきを周囲の子どもにつなぐ、また、別の遊びに発展させていく（和紙染めやジュース屋さんごっこなど）

色水遊びから発展して和紙染めを楽しむ

学びの芽生え

興味・色水作りから和紙染めに興味が広がる

自己調整・好きな色に染めるために工夫し、うまく染まらなくても根気強く取り組む

気づき・予想と実際の違いに気づき、不思議さを感じる
・和紙に色水が染みる不思議さを感じる。

てから、算数の問題を解くのも、生活科で町を探検するのも、おもしろいと感じるようになります。

「自己調整する力」とは、集中したり、根気強く取り組んだり、工夫したり、ときには我慢して先を見通しながら自分をコントロールし、今の遊びをつくっていく力です。この力は、長期間の活動をコツコツと続ける中で育ちます。特に、5歳〜7歳の時期に育てることが重要で、十分に育たないと、小1プロブレムが起こりやすくなると考えられます。

「気づき」は、思考力の芽生えと密接に関連します。例えば実をすりつぶしたら、「こんな色になった！」という発見が気づきです。気づきがあると、それを言葉にして友だちや先生に伝えたくなります。気づきやコミュニケーションを繰り返す中で、思考は深まるのです。

ここで強調したいのが、学びの芽生えは遊びの中でしか経験できないということです。ですから、小学校への準備教育だけでも、逆に単に遊ばせるだけでも、幼児期の教育としては不十分です。保育者に最も求められるのは、学びの芽生えを促すことを強く意識しながら遊びの援助をすることなのです。

小学校での学びは、中学校や高校、大学、そしてその後の人生へとつながっていきます。その出発点になるのが幼児教育であることを認識し、学びの芽生えを育てる援助を実践していただければと思います。

現場のみなさんへ

◎幼児教育の潜在的な価値は、まだまだ世の中に十分には伝わっていないと感じます。学びの芽生えが注目されている今は、幼児教育の本当の意味を伝えるチャンスといえます。これまでに幼児教育が取り組んできたよい部分を、さらによくするという気持ちで、自信をもって子どもに接してください。

理論編 2

インタビュー

保育者の「遊びの見通し」が「学びの芽生え」に結びつく

学びの芽生えを促す援助に決まったかたちはありません。必要なのは一人ひとりの子どもの状態に合わせた柔軟なサポートです。援助を行ううえで、園全体で共有したい考え方や具体的な実践方法について、「幼小接続会議」の副座長を務めた東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。

東京大学大学院教育学研究科教授
秋田喜代美
あきた・きよみ
東京大学大学院教育学研究科教授。「幼小接続会議」副座長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、『保育の心もち』『保育のおもむき』（いずれもひかりのくに）など。

学びに向かうきっかけは大人も子どもも同じ

幼児期の子どもは、どのようなきっかけによって「学び」に向かうのでしょうか。私は、子どもも大人も大きな違いはないと考えています。例えば、大人が、毎日同じ料理をルーティンワークとして作るだけなら、何も考える必要はありません。しかし、ふだんとは食材を変えてみたり、お客さんをもてなしてみたりといったきっかけで、工夫しようという気持ちが生まれます。子どもも同じで、遊びの中から生まれたきっかけを育てていくことによって、初めて学びが生まれるのです。

しかし、大人にも、常に学び続けようとする姿勢をもつ人ともたない人がいます。これは、幼児期に十分な「学びの芽生え」を経験し、それが小学校以降の学びへとつながったかどうかが大きく関係するものと思われます。

生涯学習の基盤として世界的に注目される幼児教育

◎1990年ごろから、「保育の質の効果」、そして幼稚園から高校までの「教育課程の一貫性」について、アメリカやイギリスなどを中心に議論が盛んになりました。背景には、幼児期の学びがその後の人生に多大な影響を及ぼすという考えが広く知られるようになったことなどがあります。幼いころから「わからないことを調べたい」という気持ちが育っていれば、例えば、大人になったときに自分から健康に関する情報を調べて健康管理に生かすなど、さまざまな場面で新しいものを取り入れて自分の生活をより豊かに、より幸せにすることができます。そのように、生活者として学び続ける生涯学習の基盤として幼児教育が重視されているのです。